

目的 職人の在来型労働着は印絆纏、腹掛、股引、足袋、ぞうり、わらじかけなどを、その構成要素としているが、前々報に続き今回は印絆纏をとりあげた。構成上からは簡潔きわまりない形態でありながら、職人の衣服としてこれほど職能に適合し、多目的に活用されたものは他にみられない。印絆纏は江戸後期法被にならぬ文化項生じ、次才に隆昌になったといわれるが、職人の仕事着として定着した過程をたぐね、現在なお一部職人の間に息づく絆纏の実態を把握、印絆纏のほたした機能、染色デザイン、染色工程、縫製、着装、それに込められた職人意識など、在来型労働着としての絆纏と職人の衣生活との深い結びつきを解明したい。

方法 文献 絵画資料を基として、厂史的過程をたどり、現在なお江戸職人の気風を残す江戸消防会会長 木村仁助氏、元組組頭 清宮武三氏、川越市三着組組頭 渡辺寛造氏ほか多くの葛職人、浅草寺・浅草神社御用堂司 久下照三郎氏、東京木場棧株式会社会長 小安四郎氏、製作面からは根岸で三代目海老屋を継ぐ林満治氏などから、実態探検し資料提供をうけておこなった。

結果 仕着せ絆纏の背の火紋、衿字、腰の標目は身分証明として機能し、大店より支給される店絆纏には連帯感と義理人情がこめられ、店の宣伝にも一役かっていた。絆纏のデザインには、職人の気風のよさとエネルギーが投影され、漸新で江戸庶民の美意識に合致したものであった。江戸職人の誇りの意識と心意気は、この在来型労働着を着る人々によって今も保持され、その独特の染色技術とともに受けつがれている。